

今月のエキゾチック症例(第10回 2024年2月)

巨大なのに良性？ーラットの乳腺線維腺腫ー

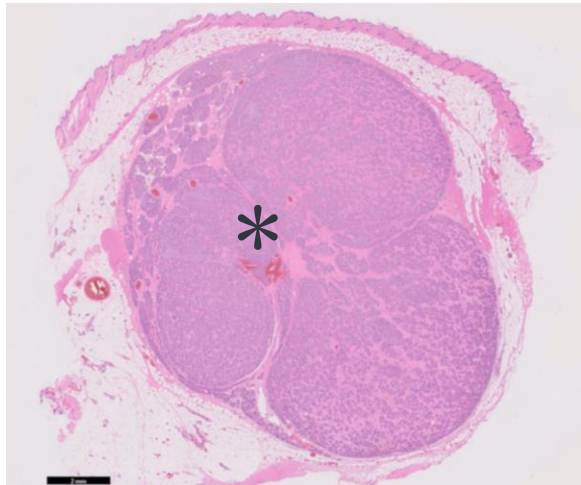


図 1. 組織写真、ルーペ像。皮下組織中の乳腺領域に境界明瞭な腫瘍(*)が形成されています(図上が皮膚側、図下が皮下側)。線維(濃いピンク)に区画されて多小葉状を呈しています。

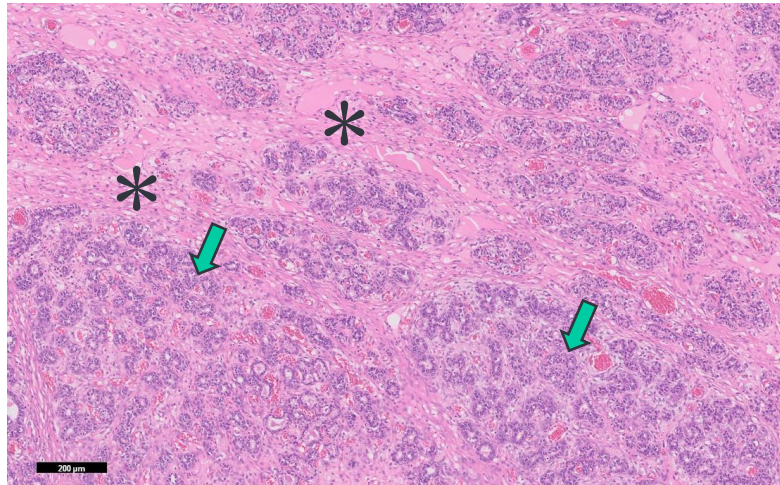


図 2. 組織写真、中倍像。豊富な膠原線維(濃いピンク)を伴いながら、乳腺上皮由来腫瘍細胞の腺管状増殖(矢印)が認められます。線維化が小葉間(*)と腺房間の両方で生じているのが分かります。

ラットの乳鎖は頸胸部～鼠径部に分布し、乳頭は6対です。乳腺線維腺腫は、ラットの乳腺腫瘍で最も多い組織型です。腫瘍が巨大化することもあります。通常は被包されて可動性があります。悪性転化や転移は一般的ではありませんが、大型化に伴う自潰や運動障害は起こり得ます。

腫瘍断面の肉眼像や組織学的な弱拡大像では、腫瘍は多小葉状を呈します(図1)。高分化な乳腺上皮由来腫瘍細胞の腺管状増殖とともに、小葉内と小葉間において豊富な線維増生を伴います(図2, 3)。症例や領域により上皮と線維の割合は様々です。

通常は切除で治癒しますが、ラットでは卵巣からの性ホルモンの他、プロラクチン産生性下垂体腫瘍が乳腺腫瘍発生に関連していることもあると言われています。しかし、高齢の未避妊雌での発生が多いので、他の動物種と同様に、長期管理を目的として乳腺腫瘍摘出と同時の避妊手術、または若齢での避妊手術が推奨されています。

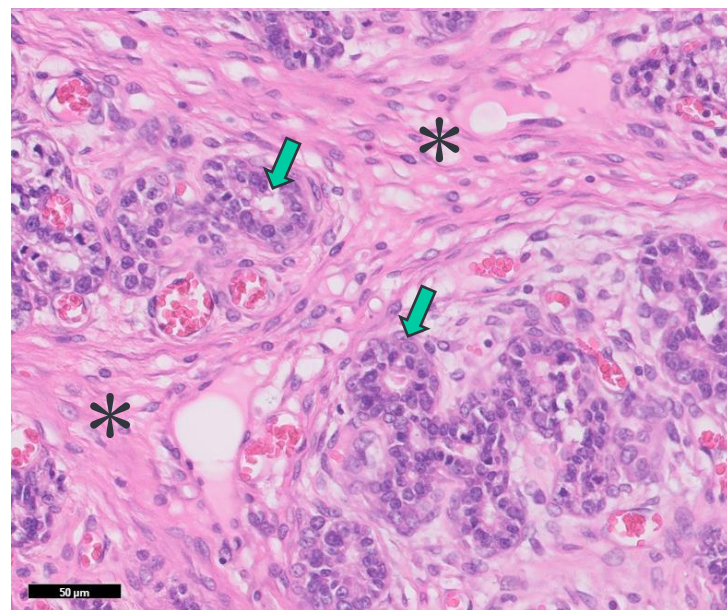


図 3. 組織写真、高倍像。乳腺上皮由来腫瘍細胞が腺管状に増殖しており(矢印)、小葉間(*)と小葉内において紡錘形の線維芽細胞の増殖が混在しています。どちらの増殖細胞も高分化で異型性は目立ちません。

診断医からの一言

無断での転用/転載は禁止します。

エキゾチックペット業界では「ファンシーラット」とされていますが、私はラットと聞くと「ドブネズミ」や「実験動物」を連想してしまいます。そして、運悪く大学時代に凶暴なラットにばかり遭遇していたので、未だに「ファンシー…、ファンシー…？」とゲシュタルト崩壊に陥ります。これを読まれているみなさまはいかがでしょう？ですが、飼い主さんとラットちゃんがよければそれでよいとも思っています。

参考文献

1. Pathology of Laboratory Rodents and Rabbits. 4th ed. 2016. Wiley-Blackwell.
2. Pathology of Small Mammal Pets. 2018. Wiley-Blackwell.
3. Ferrets, Rabbits, and Rodents Clinical Medicine and Surgery. 2021. Elsevier.



診断医: 中嶋 朋美
DVM, PhD, DJCVP